印度學佛教學研究第四十四巻第二号　平成八年三月

瑩山下における曹洞宗の展開
――尾張乾坤院を中心として――

佐藤悦成

(一)　乾坤院と水野氏

瑩山紹瑾（一二六八～一三二五）の会下に明峰素哲（一二七七～一三五〇）・峨山紹碩（一二七六～一三六六）の二神足が出ることで、曹洞の門葉は越能加三国の小教団を脱して全国に弘まる契機を得た。

拙論では、峨山門下の太源宗真（?～一三七一）の系譜に位置する梅山聞本（?～一四一七）の門流にみられる教線拡大の方途を、尾張国緒川の宇宙山乾坤院に所蔵される三種の資料に基づいて論じることとする。

乾坤院は、太源――梅山――如仲天闇――真巌道空――川僧慧済（?～一四五七）と次第する太源派に属し、遠江一雲斎を開いた川僧を勧請開山に迎え、文明七年（一四七五）に創建された。開基となったのは、尾張緒川城主水野貞守であり、俗縁が水野氏に連なるといわれる逆翁宗順（一四三三～一四八八）が二世に下って同寺の運営に当ったのである。その沿革から、同寺は水野一族の氏寺として機能することが求められ、引き換えに政治的・経済的外護が加えられたと観てよいであろう。

水野氏の出自は、美濃源氏の一流である小川氏にあり、居城の緒川は「小川」から付された名といわれる。承久の乱（一二二一）に敗れた小川氏は、母方姓の水野に改姓して失地の回復を計り[1]、尾張南部を領有していた足利一族の一色氏、並びにその守護代として大野城にあった佐治氏と対立することになる。ところが、宝徳二年（一四五〇）には佐治氏は主家たる一色氏の勢力を当地域から駆逐し、同じく一色家臣で渥美田原城主であった戸田氏と盟約を結んで尾張の分割支配を試みたのである。この内訌に乗じる形で水野氏は支配力を強め、在地勢力を抑え込むとともに佐治・戸田両氏をも従属させて当地域の統治に成功するのである。

その過程において乾坤院は水野氏の精神的象徴であったといえ、一族の歴史を学び、結束を固める場として同寺は位置づけられた。更に、水野氏が勢力を拡大し、各地に分家が配されて要所を固めると、その地に乾坤院より住持を迎えて寺院を建立、又は既存の寺院を曹洞宗に転宗させたのである。(2) これにより、当地域において曹洞宗は他宗派を圧倒する勢力となり、乾坤院はその頂点に位置したのである。

乾坤院と水野氏の関係は、全国に曹洞宗が弘まってゆく過程での典型的形態といえる。

(二) 乾坤院蔵『歴代結算簿』

政治勢力に外護されての教線伸長から、如何に本来の宗教的立場に立っての布教化導を行うかが次の課題であったことはいうまでもない。

権力者による庇護に甘んじ、宗教の意義を忘れたならば、そのような空虚な存在に人々は自らの信仰を託すことはない。外護者の衰退が寺院の荒廃に直接結び付いた例は極めて多い。当地域において曹洞宗侶がどのような活動を展開したかを資料に基づいて次に観る。

乾坤院からは、既に『血脉衆』と題される二世逆翁の手になる授戒会記録と、『小師帳』と記される三世芝岡宗田（?～一五〇〇）による戒弟名簿が紹介されている。広瀬良弘博士は右の二書について、『禅宗地方発展史の研究』において論じ、曹洞宗の展開を考える上での重要資料と位置づけられた。

拙論では、上記二書とともに、新たなる資料として、乾坤院『歴代結算簿』を併せ用いて論考を進める。それは、布教の方途として催行された授戒会は、信徒の獲得、宗侶の連携と結束を促すとともに、寺院経済にも大きな影響を与えていたと考えるからである。

外護者・信徒と寺院の関係は、信仰上の結び付きであると同時に、経済的結合でもある。これ迄の研究において、前者の諸問題は多く論じられてきたが、後者については資料の不足もあって看過されてきたといえる。その意味で、十五世紀から十六世紀前半の、曹洞宗発展期ともいえる時代の布教形態と寺院経済を解明する手掛がここにある。

『血脉衆』は、文明九年（一四七七）から、同十九年までに、乾坤院・一雲斎・大洞院ほかで催行された授戒会について、日時・場所・戒弟名・住所・引請師などについて適宜記したもので、逆翁の個人的名簿といってよい。ここで注目すべきは、同寺開創の二年後には授戒会を催し、半年間で一八九名もの戒弟を集めていることである。

戒弟の住所は同寺周辺が多数を占めるものの、尾張南部、三河からの参加も見られる。また、苗字を持つ者も記されて

おり、在地の土豪、上層農民など地域の有力者が戒を受けていることが判明する。この点は水野氏の政治力が影響した部分ともいえるが、『血脉衆』に記される戒弟数は七百名を超えるから、全てを権力による動員であったということはできない。また、同書に記される水野一族は五名にすぎず、この点からは水野氏が後援者として催行されたというより、逆翁の布教活動の成果と見ることが正当な評価といえる。

逆翁は授戒会作法を川僧の会下に留まった時会得したものと考えられる。『血脉衆』末尾には、遠江大洞院二世の如仲天闇ほか、同門の諸師名と戒弟数、年次がメモ書きで残されている。[3] このことは、大洞院・一雲斎を中心とした遠江の太源派諸師は、化導の方途として授戒会を頻繁に催行していたことを示しているとともに、それら諸師は緊密に連絡をとり合い、互いの授戒会に戒弟を引いていたと考えられる。それは、『血脉衆』の中に引請師として同門の僧が記されていることにより明らかである。

ところで、逆翁の師川僧について先のメモ書には触れていない。川僧は『人天眼目抄』を著すなど、当時を代表する学僧の一人であったが、同時に、葬送儀礼を行って「下炬法語」を多く残してもいる。逆翁も文明十二・十三年に一雲斎で授戒会を開いているから、川僧の記録が欠如しているのは、師への礼を失しない逆翁の配慮であったと考えるべきである。

それは、『血脉衆』文明十九年九月の項に、雲蓋庵（不詳、戒弟の住所から遠江か）での戒弟に「成果」という者が記され、付記として「野部治部殿」（一雲斎に近い野部の有力者）と、「川僧和尚小師」（川僧の弟子）の二句があるところから、川僧が授戒会を行わなかったとはいえないからである。

また、逆翁の授戒会に川僧下での兄弟弟子であった以翼長祐（一四一六～一五〇二）の嗣竺雲一鳳、更に行之正順が引請師として加わっているのも見逃すことはできない。

ただし、如仲門下においても、備中へ向かった喜山性讃（一三七七～一四四二）、近江の真巌道空（一三七四～一四四九）の名は戒師の中に見出すことができず、美濃の月泉性印（一四〇八～一四七〇、霊嶽の嗣）も記されないところから、授戒会の催行については、諸師の家風とともに地域の状況を把握した考察が必要となろう。

逆翁は先の諸師の中で、盛禅にのみ「和上」を記していない。この点については次のように考えられる。『血脉衆』の引請師に「一復」という僧が見え、『小師帳』の中にも仲介者として記される。更に、「結算簿」の明応五・六・七年の項にもその名が記されている。「結算簿」には、知多郡大夫（大府）に住す「一復」が、乾坤三世芝岡宗田の元にあって、乾坤院の経理にも携わっていたことが記される。この「一

復」とは、後に盛禅の法を嗣ぐ来鳳一復のことであるから、請われて乾坤院から瀬戸福巌寺に移ったと考えられる。このことは、逆翁・芝岡の師資と盛禅は極めて親密な関係にあったことを示している。尾張の北と南で太源派の拠点を築きつつあった立場に対する共感が両者あったとも推察できる。

『血脉衆』において更に注目すべきは、文明十五年の戒弟に、越後蒲原郡石瀬より長因という者が参加していることである。付記として「種月南英小師」とあり、越後種月寺の南英謙宗（一三八七～一四六〇）の俗弟子と判明する。越後種月寺と尾張乾坤院の接点はどこにあるのであろう。

逆翁の著に『蔵鷺集』がある。内容は禅語の解説、諸祖の行実、一般的語句の註釈と、南英の著した『重離畳変訣』の書写である。逆翁は易学・陰陽道を学んで出家したといわれるから、五位については興味を持っていたといえるし、師として川僧を選んだのも、川僧の学識と、中でも『人天眼目』を注釈するほど五位に詳しかったゆえとも推察できる。

南英と川僧の五位に対する理解は、曹洞五位の本流を守らんとするものである。五位の配列、「偏中至」を用いて「兼中至」を排する点において両者は主張を同じくする。逆翁が南英の著述をいちはやく書写していることから推して、南英と川僧には交流があったと観るべきである。

この考察は別に譲るが、南英・川僧が五位説を正さんと努力することになる原因は、大智祖継が元より帰朝した時、永光寺の瑩山に「五位君臣」二冊をもたらしたことにある。

㈢　授戒会と寺院経済

『小師帳』は、乾坤三世となる芝岡が、師逆翁の『血脉衆』に習って記録した授戒会の記録である。延徳二年（一四九〇）・三年の日付があり、戒弟数九五を記す。

特徴としては俗縁に関する付記が詳しく、苗字を持つ者、その家族の受戒が多いことである。水野一族からの戒弟も三名あり、乾坤院と水野氏の関係が継続していたことを示している。

『血脉衆』と比較すると、本書は戒弟全てを記さず、主な者のみに留めたかの印象を受ける。また、「血斗」と記し、授戒会に参加せず、血脉のみ付与された人々が増加しているのも注目すべき点である。

引請師として、先に記した来鳳一復のほか、芝岡下の三傑として、乾坤三派を形成する亨隠慶泉、周鼎中易の名がみえ、また、亨隠の嗣大中一介（一四四七～一五三二）も記されることから、『血脉衆』と『小師帳』の関係は次世代への継続として捉えることができる。

両書に記される授戒会が当地域の曹洞宗展開に与えた影響は、信徒の獲得のみではない。戒弟の中には僧侶も多く含ま

れており、その数は百名を超える。当時はまだ真言宗に属していた奥田報恩寺から、文明十年十月に野間で開かれた授戒会に七名の僧が参加しているのは、後の展開を考える上で重要である。

同寺は永正十二年、乾坤五世・常滑天沢院開山となる雲関珠崇[4]の手により曹洞宗へと改宗されているから、住僧が授戒会に参加することで曹洞宗との関係が結ばれ、後には授戒会の引請師として面識のある曹洞宗侶を受け入れるという、曹洞宗が勢力を拡大してゆく過程の好例となる。

両書に記される諸師が、戒弟を募って各地を巡り、他宗の寺院・庵に宿を借りることが、曹洞宗進出の基盤を形成していたといえよう。

では、先の雲関にみられるような引請師の活動を、経済的に支えていたのは乾坤院のいかなる収入であったのであろう。この点で「結算簿」の持つ意味は重要である。

本書は、表紙に「一枚紙写第一」と記されていることから判明するように、元来は輪住年毎に記して次に送っていたものを、乾坤百七十世万国義春が、宝暦二年（一七五二）の輪住期間にまとめて書写したのである。内容は、輪住が始まった永正元年（一五〇四）から天正六年（一五七八）までの七十五年間、三十五代の収支である。天正六年以降は、巻紙に順を追って記し、住持交替に際しては照合印を押して確認するという事務手続が行われるようになるため、それ以前の「結算簿」の散佚を防ぐ意味で書写したのであろう。

本書には、祠堂金の金額、施主名、それに関連する事項が記され、また、田畑の年貢、貸し金の返済状況、購入品の名目と金額、そして事務担当者への現金払い出しが記されている。

施主には水野一族のほか、阿久比久松氏（水野の家臣）、刈谷奥田氏（水野氏領地内の土豪）ほかの名が記され、開基家一族郎党が乾坤院の基盤を支えていたことが判明する。開山と二世逆翁の代については既に散佚（開山は勧請開山のためもともと無い）しており、三世芝岡の代から記すと添書きされるが、明応七年までの部分には、『血脉衆』『小師帳』に記される人々の名が散見され、授戒会の催行が、乾坤院の経済をも潤していたことが明らかとなるのである。

1　十五世紀の尾張南部を統御したのは一色氏であり、その領地内に点在したのが熱田社領、真言宗京都安楽寿院領であった。水野氏は熱田社領の荘官として再起を計った。

2　常滑水野が天沢院を、緒川水野は伝宗院、大高水野は春江院を建立し、更に、常滑水野は南下して奥田に在った真言宗報恩寺を曹洞宗に改めている。

一般的に、氏寺の起源は聖徳太子が父用明帝の供養を名目として法隆寺を建立した時代にまで遡る。氏寺は、従来氏神がその機能としていた祖霊崇拝を継承することで、日本に仏教という外来の文化を定着させるという役目を果したと観ることがで

きる。天皇家の寺として泉涌寺があった事実は右の点を示すものである。武士が政治の実権を握ると、氏寺はより重要な存在となってゆく。武士とは地縁・血縁による党的結合の集団である。その意味で武士の権威は現実的・在地的であった。武士は自らの所領に寺院を建立し、そこにおいて武運長久・子孫繁栄などを祈るとともに、一族の過去を学習して自らの存在を再認識するという修道の場ともしたのである。

武士の所領には経済体としての性質と、先祖の権威という精神的機能が併存している。「先祖に恥じない行動」をとらんとする規範精神の現実的認識の場が、非常時における戦場であり、日常の氏寺であったといえる。

3

①橘山二代禾上（ママ）　応永戊戌　九百二人
②法山和尚　永享十年　百十九人
③月因禾上　三百三十一人　五年住文安
④茂林禾上　二百五十六人　宝徳四年壬申
⑤霊嶽禾上　八十九人　寛正三年八月三日
⑥宗之禾上　百五十七人　文明六年甲午
⑦石宙禾上　二百三人　文明十年戊戌
⑧盛禅　百四十六人　文明十六年甲辰
⑨宗順　二百七十六人　文明十九年丙午　十八年　八月

右の番号は便宜上筆者が付した。説明を以下に添える。

①橘山は遠江大同院を指し、二代は如仲天闇のこと。応永戊戌は二十五年（一四一八）
②法山とは法山阿浄（不詳、如仲の嗣）
③月因とは月因法初（?～一四三三、同右）
④茂林とは茂林芝繁（一三九三～一四八七、如仲下喜山性讃の嗣）
⑤霊嶽とは霊嶽洞源（?～一四九一、同右）
⑥崇之とは崇之性岱（一四一四～一四九六、茂林の嗣）
⑦石宙とは石宙永珊（?～一四八七、川僧の嗣）
⑧盛禅とは盛禅洞奭（一四三四～一五一八、霊嶽下の月泉性印の嗣）
⑨宗順とは逆翁宗順自身を指す。

他の諸師は法号を記し、自分は名を記している。また、如仲から石宙までには和上（尚）を付すが、盛禅には記さない。宗順の項の年号が十九・十八と記されるが、干支は「丙午」とあるから十八年が先に記され、十九は後に添えられたものと考えられる。

〈キーワード〉逆翁宗順、乾坤院、結算簿

（愛知学院短期大学教授）

新刊紹介

池田魯参　著

詳解　摩訶止観　現代語訳編

A5判・七〇二頁・定価一五、四五〇円
大蔵出版・平成七年一二月